資料

学級集団における大局的構造特性と児童のモラル

田 崎 敏 昭*

狩 野 素 朗**

MACROSCOPIC CHARACTER OF SOCIOMETRIC STRUCTURE AND
SCHOOL MORALES IN THE CLASSROOM

Toshiaki TASAKI AND Soro KANO

The first purpose of the present study was to propose a measuring procedure of the macroscopic character of sociometric structure deduced from a graph theory called “sociometric condensation model”. In this model, the following five dimensions were proposed to identify the macroscopic structure: unity, centralization, polarization, hierarchy and density. The other purpose was to apply this model to classrooms and to investigate the relationship between the macroscopic character and pupils’ school morales. Sociometric test and school morale questionnaires were given to 31 classes in 5 elementary schools. The relationship between unity, centralization and hierarchy, and school morales was found.

Key words: classroom, macro-structure, sociometry, condensation, school morale.

従来、学級集団については、ソシオメトリック構造の視点から多くの研究が行われてきた。このソシオメトリック的技法による構造把握の方法は、集団内の人間関係を数量的（例えば、集団内地位指数や集団凝集度指数）に表現出来ると共に、ソシオグラムとして視覚的にも表現出来る。このソシオグラムは、直観的に集団構造を理解することが出来るという長所をもつが、それを作製する際、一定の定形的手法がないので、作図された結果は、製作者の主観や技術に影響されることが少なくない。そのため、場合によっては適切な表示がされず、かえってその構造を理解することが出来ないこともある。また、集団の構成員が多くなると、それだけ関係を示す線の数が多くなり、線と線が交錯して複雑になるため、集団の構造を大局的に把握することが出来にくくなる。

ソシオグラムにおけるこのような難点を解決するため、狩野（1980, 1985）はグラフ理論におけるコンデンセイ

ションの手法を用いて集団の大局的構造をより単純な形で表現する方法を考案した。

それは、ソシオメトリック構造における相互選択関係を基準にして成分を構成し、順次凝縮していくやり方である。これを、ソシオメトリック・コンデンセーションと呼ぶ。FIG. 1 に例示されたソシオグラムは、この手法により FIG. 2 のようなソシオメトリック・コンデンセーションとして表現することができる。ここで、FIG. 1 のソシオグラムから FIG. 2 のコンデンセーションにどう凝縮していくかについて簡単に述べてみる。

ステップ 1：相互選択関係にある成員たちを全てまと

A—Iは個人、矢
印はその選択関係
を示す。

FIG. 1 ソシオグラムの例

* 佐賀大学教育学部 (Saga University)

** 九州大学教育学部 (Kyusyu University)

FIG. 2 ソシオメトリック・コンデンセーションの1例

めて、集合 (M_1, M_2) をつくる。この段階で FIG. 1 のソシオグラムは FIG. 3(a) のようになる。

(a)

(b)

FIG. 3 凝縮の過程

ステップ2: 1つの集合を、1人の成員と同様に1つの成分と考えるなら、FIG. 3 (a)は FIG. 3 (b)のように表現することができる。R₁~R₇ は、本来成員間の選択関係であるが、集合をつくった場合、集合と集合、集合と成員なども成分間の関係と見做すことにする。

ステップ3: R₁~R₇を成分間の関係とすれば、FIG. 3 (b)の R₁ と R₂ は M₁ と M₂ の相互選択関係、R₃ と R₄ は M₂ と G との相互選択関係を示していることになる。そこで、M₁ と M₂、M₂ と G をまとめ新しい集合をつくる。こうしてまとめたものが、FIG. 2 である。これ以上は、成分間に相互選択関係がないので、これを最終的なソシオメトリック・コンデンセーションとする。

このようにして画かれた構造は一樣ではなく、さまざまな特徴をもつ。この構造の特性を記述するため、狩野 (1980, 1985) は統合性、集中性、階層性、極性、稠密性の5次元をあげているが、このうち集団の識別性が高いのは統合性、集中性、階層性なので、本研究では、この3つの次元を適用する。

「統合性」とは、構造を全体としてみたとき、その連なり具合である。学級集団の場合、その学級が全体として2つあるいはそれ以上に分離していない統合構造、いくつかのまとまった塊に分離している分団構造等に区別される (FIG. 4(a)(b))。

(a) 統合構造

(b) 分団構造

FIG. 4 統合性の例

「集中性」とは、構造内における中心と周辺の分化の度合を言うものである。ある1つの中心的成分に他の成分からの選択が集中していれば、それは高集中構造 (FIG. 5(a)) であり、中心と周辺の分化が進んでないものは低集中構造 (FIG. 5(b)) である。

「階層性」とは、組織体におけるフォーマル構造のような階層がどの程度存在するか、の次元である。階層の分化の度合いが強い高階層化構造、分化の度合いが弱い低階層構造、階層が存在しない無階層構造などに区分される。

(a) 高集中

FIG. 5 集中性の例

(FIG. 6(a)(b)(c)) 本研究では階層の有無だけを問題とした。

このようなソシオメトリック・コンデンセーションは、集団構造の記述方法として、それなりの有用性をもつと思われる。しかし、このような手法によって明らかにされる構造特性の形成過程や、その構造特性が集団及び集団成員に及ぼす影響などが明らかにされるなら、その有用性はさらに増すであろう。本研究は、そうした脈絡の1つとしてコンデンセーションの手法によって学級集団の構造をとらえ、そこで明らかになる大局的構造の諸特性と学級成員のモラールとの関係を検討しようとするものである。

FIG. 6 階層性の例

方 法

調査対象 K県下5つの小学校4, 5, 6年より、それぞれ10学級342名, 10学級353名, 11学級344名の計1039名の児童を調査の対象とした。

調査日時 昭和58年9月, 10月。

調査内容 2種類の質問紙を用意した。1つは、学級構造を測定するためのソシオメトリック・テストであり、これは、「学習」および「遊び」を基準にして、学級の中からそれぞれ3名を選択させた。

もう1つは、児童のモラールを測定する項目群である、これは、学級の雰囲気、級友との関係、学習意欲のサブカテゴリーに分け、SMT, 吉崎(1978), 三隅(1978)などを参考にし、以下に示す9つの質問項目により測定した。

学級の雰囲気 (1)「あなたの組は明るく楽しい組だと思いますか」、(2)「あなたの組はよくまとまっていると思いますか」、(3)「あなたの組の人たちは協力的でたすけあっていると思いますか」

級友との関係 (4)「あなたの組の人たちはみんなあなたに親切してくれますか」、(5)「あなたは、組の人たちからすかれていますか」、(6)「あなたの組には、あなたの尊敬する友だちがいますか」

学習意欲 (7)「勉強をしていてわかってくると楽しいと思いますか」、(8)「授業中、先生にあてられるのはす

きですか」, (9)「もっと勉強してよい成績をとろうと努力していますか」

各項目とも5段階の選択肢を持ち, 集計にあたっては, positive な反応から negative な反応へ5~1の得点を付与した。また3つのサブカテゴリー得点を合計して「総合モラール」とした。

調査の実施 学級担任による集団面接によった。

結果と考察

学級の構造特性の分類 実際の調査対象は31学級であったが, 児童数が10名以下の小数学級は分析から省いたので, 以後は26学級が分析の対象となる。また, 小学校中学年以上では, これまでの経験からして, 学級の中で, 男女が混合したインフォーマル集団を形成することは稀であり, 本研究でも, ソシオメトリック・テストで異性を選択するケースは皆無に近かったので, 1学級の中でも男女は別々の集団と見做すことにした。従って, 分析の対象は男, 女それぞれ26集団, 計52集団である。

各次元におけるカテゴリーの分類基準について狩野は別に提唱しているが(1980, 1985), それはまだ確定的なものではない。従って, 現段階では, 現実の集団を分類する際, 対象となる集団を総合的にみて相対的に分ける方がより妥当であろう。本研究でも, 分析対象となった52集団を総合的にみて, TABLE 1, に示すような, 分

TABLE 1 各次元における分類カテゴリーと分類基準

次元	カテゴリー		分類基準
	統合	分団	
統合性	統合	分団	下位集団の数1 2以上
	高集中	低集中	1個のコンポネントをとりまく矢の数5以上 4以下
階層性	有階層	無階層	一方向に進んでいるコンポネント間の矢の数1以上 0

類カテゴリー及び分類基準を設定した。

構造特性と児童のモラール TABLE 2, TABLE 3, TABLE 4 は, 各次元ごとに TABLE 1 の基準によって集団を分け, 男女別, 選択基準別に各群に該当する学級児童のモラールの平均値を比較したものである。

統合性次元の場合, 選択基準が「遊び」において, 男子では, 統合構造群の児童の「総合モラール」は, 分団構造群の児童よりその平均値が高く, 「学級の雰囲気」, 「学習意欲」などにおいても前者が後者より高い。しかし, 女子では, 逆に分団構造群の児童の方が, 「学級の雰囲気」, 「級友との関係」(差の傾向)などにおいて児童より平均値が高くなっている。

集中性次元では, 選択基準が「学習」において, 男子の高集中構造群の児童は低集中構造群の児童より「学習意欲」の平均値が高い。選択基準が「遊び」の場合, 男

TABLE 2 統合性の違いと児童のモラール

選 択 基 準		学		習		遊		び	
		男		女		男		女	
統 合 性		統合	分団	統合	分団	統合	分団	統合	分団
児童数(集団数)		307(17)	160(9)	266(15)	229(11)	271(15)	196(11)	183(10)	307(16)
学 級 の 雰 囲 気	$\bar{X}$	10.2	10.4	10.4	10.4	10.5	9.9	10.2	10.6
	S.D	2.3	2.2	2.1	2.0	2.0	2.5	2.0	2.1
	t-test	n.s.		n.s.		p<.01		p<.05	
級友との 関 係	$\bar{X}$	9.7	9.4	9.8	9.9	9.6	9.5	9.7	10.0
	S.D	2.3	2.1	1.9	1.9	2.0	3.5	1.9	1.8
	t-test	n.s.		n.s.		n.s.		p<.10	
学習意欲	$\bar{X}$	11.2	10.8	11.1	11.3	11.4	10.5	11.2	11.2
	S.D	2.2	2.3	2.0	1.9	2.1	2.4	1.8	2.0
	t-test	p<.10		n.s.		p<.01		n.s.	
総 合 モラール	$\bar{X}$	31.1	30.7	31.5	31.6	31.7	30.0	31.1	31.8
	S.D	5.3	5.2	4.8	4.6	4.6	5.9	4.5	4.8
	t-test	n.s.		n.s.		p<.01		n.s.	

TABLE 3 集中性の違いと児童のモラルの平均

選 択 基 準		学 習				遊 び			
		男		女		男		女	
集 中 性		高	低	高	低	高	低	高	低
児童数(学級数)		325(18)	142(8)	77(4)	318(22)	217(12)	250(14)	42(3)	453(23)
学 級 の 雰 囲 気	$\bar{X}$	10.3	10.2	10.3	10.5	10.5	10.0	9.4	9.7
	S.D	2.3	2.1	2.0	2.0	2.3	2.2	1.6	3.4
	t-test	n.s.		n.s.		p<.05		n.s.	
級友との 関 係	$\bar{X}$	9.6	9.4	9.7	9.9	9.8	9.4	9.8	9.1
	S.D	2.3	2.0	1.9	1.8	2.3	2.2	1.9	3.2
	t-test	n.s.		n.s.		p<.10		n.s.	
学習意欲	$\bar{X}$	11.2	10.7	11.3	11.1	11.2	11.0	9.9	10.4
	S.D	2.3	2.0	1.7	1.1	2.3	2.3	2.1	3.2
	t-test	p<.05		n.s.		n.s.		n.s.	
総 合 モラル	$\bar{X}$	31.2	30.5	31.4	31.7	31.6	30.5	29.1	29.3
	S.D	5.6	4.3	4.4	4.8	5.4	5.0	4.5	9.6
	t-test	n.s.		n.s.		p<.05		n.s.	

子において高集中構造群の児童の「総合モラル」,「学級
の雰囲気」,「級友との関係」の平均値は,低集中構造

群の児童の平均値より有意に高い(学級の雰囲気の場合
は差の傾向)。

TABLE 4 階層性と児童のモラルの平均

選 択 基 準		学 習				遊 び			
		男		女		男		女	
階 層 性		有	無	有	無	有	無	有	無
児童数(学級数)		217(11)	250(15)	166(8)	329(18)	212(12)	255(14)	73(4)	422(22)
学 級 の 雰 囲 気	$\bar{X}$	10.0	10.4	10.6	10.3	10.5	10.0	11.0	10.3
	S.D	2.4	2.1	2.1	2.0	2.3	2.2	1.8	2.1
	t-test	p<.10		n.s.		p<.05		p<.01	
級友との 関 係	$\bar{X}$	9.4	9.4	10.0	9.8	9.7	9.5	10.4	9.7
	S.D	2.5	1.9	1.9	1.9	2.2	2.2	1.6	1.9
	t-test	n.s.		n.s.		n.s.		p<.01	
学習意欲	$\bar{X}$	10.8	11.3	11.5	11.1	11.1	11.0	11.3	11.2
	S.D	2.4	2.0	1.8	1.0	2.3	2.1	1.7	1.3
	t-test	p<.05		p<.01		n.s.		n.s.	
総 合 モラル	$\bar{X}$	30.3	31.6	32.1	31.0	31.4	30.6	32.1	31.0
	S.D	5.9	4.5	4.4	4.8	5.6	4.9	4.4	4.8
	t-test	p<.01		p<.05		p<.10		p<.05	

階層性次元では,選択基準が「学習」の場合,男子に
おいては「学習意欲」,「総合モラル」において,無階
層構造群の児童の平均値が有階層構造群の児童のそれよ
り高い。しかし,女子は,男子とは逆の結果である。

一方,選択基準が「遊び」の場合,「学級の雰囲気」
では男女共,「級友との関係」,「総合モラル」では女
子において,有階層構造群の児童の平均値が,無階層構
造群児童の平均値より有意に高い。

以上の結果より構造とモラルとの関連を総合的にみると、男子集団の場合、分団構造より統合構造において、また低集中構造よりも高集中構造の学級において児童のモラルは高いと言える。この傾向は、選択基準が「遊び」の場合より顕著である。また、「遊び」の場合に限って、有階層構造群の児童のモラルは無階層構造群の児童のモラルより高い傾向もみられる。こうした結果は、対象が小学校高学年であったということに依存するものと考えられる。この年齢の頃からの男子は、1つの課題を達成するために徒党を組もうとする。人と人との結合には単に「好き」とか「快」とかいう情緒ではなく、何かを一緒にやりたい、やるとおもしろいといった課題志向的気持の方が高揚する。徒党は、人が集まっているというのではなく、リーダーの下に結集するといった形を好むのである。従って、学級もそうした欲求をより満たす構造、つまり、統合、高集中、有階層といった集団においてモラルが高くなっていると考察できる。

一方、女子においては、ある特定の個人に勢力が集中した集団は好まない。2～3人、3～4人の心の通い合

った関係の中で過ごすことを好む傾向、つまり親和志向の特性にある。従って男子ほど顕著ではないが、より分団構造群においてモラルが高いと考えられる。階層性次元において、有階層群の児童のモラルは無階層群の児童のモラルより高いが、これも、年齢集団の特性という点から考えるなら、階層が存在するというより、階層を可能にする小集団に満足しているのではないかと推察される。

引用文献

- 狩野素朗 1980 集団の大局的構造特性とソシオメトリック・コンデンスエイション 九州大学教育学部紀要, 24巻2号, 13—23.
- 狩野素朗 1985 コンデンスエイション法による大局的集団構造特性の集約 実験社会心理学研究, 24巻2号 (印刷中)
- 三隅二不二 1978 リーダーシップの行動科学 有斐閣
- 吉崎静夫 1978 教師のリーダーシップと学級の勢力構造に関する研究 心理学研究, 49巻, 22—29.

(1985年2月1日受稿)